

ごあいさつ



公益財団法人 糸賀一雄記念財団 理事長 辻 哲夫

みなさんこんにちは。ご紹介いただきました理事長の辻でございます。「第19回糸賀一雄記念賞」および「第3回糸賀一雄記念未来賞」授賞式の開催にあたりまして、一言ごあいさつ申し上げます。

故糸賀一雄先生は、戦後間もない本当に荒廃した社会状況の中で、戦災孤児と知的障害のあるお子さんたちのために福祉施設近江学園を同志とともに創設され、障害の問題を通してあるべき社会を訴え続けられました。わが国の知的障害者の父とも呼ばれ、滋賀県内はもとより全国の実践分野に優秀なリーダーを送り出されるほか、知的障害者福祉法の制定の原動力として活躍されるなど大きな足跡を残されました。

その実践の過程で深い考察を重ねられ、どんな重い障害のあるお子さんにも必ず発達する力があり、それを保障する必要があるという論理を明らかにされるとともに、「この子らを世の光に」という強いメッセージを後世に残されました。

先生の著書「福祉の思想」の中で次のような文章があります。「この子らはどんなに重い障害をもつていても、だれととりかえることもできない個性的な自己表現をしているものなのである。人間と生まれてその人なりの人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。私たちのねがいは重症な障害をもった子たちも、立派な生産者であるということ、認めあえる社会をつくらうということである。「この子らを世の光を」あててやろうという あわれみの政策を求めているのではなく、この子ら自らが輝く素材そのものであることから、いよいよ みがきをかけて輝かそうというのである。「この子らを世の光に」である。」こうおつ



しゃっています。深い感動を覚えます。

この言葉に現されているように、人の尊厳の輝きを認め合い、共に生きる社会をつくろうと、糸賀先生の思想と実践を今の時代状況の下でとらえ直し、次代に引き継ぐ取り組みを進め、誰もが安心して生活することができる福祉社会の実現を目指したい、このような目的で、平成8年に糸賀一雄記念財団は設立され、主に障害福祉分野での普及啓発や表彰事業を行ってまいりましたが、「この子らを世の光に」という言葉に現れた思想は、あらゆる個人の尊厳を等しく尊重するという、障害の有無、年齢、性別、国籍等を問わない普遍的なものでありますので、時代の変化に応じて表彰の対象内容を順次見直してまいりました。

「糸賀一雄記念賞」については、2年間の検討を経て、障害福祉の分野で顕著な活躍を長年されている個人・団体だけでなく、「障害者などの生きづらさがある人に対する実践活動」にまで広げることといたしました。このことにより、先に実施しておりました「障害福祉に関する取り組みのみならず、福祉・教育・医療・労働・経済・文化・スポーツなど、さまざまな分野における障害者または障害者と同様に社会的障壁による生きづらさがある人に関する先進的な取り組み」これを対象とする「糸賀一雄記念未来賞」と並ぶこととなりました。

今年度は、このような経過を経まして、3年ぶりとなる「糸賀一雄記念賞」と3年目となる「糸賀一雄記念未来賞」の募集を行いました。多数の応募をいただきました。後ほど選考委員会の大熊由紀子副委員長から、選考経過の報告をいただきますが、受賞された方は、どの方も素晴らしい実践により大

きな成果をあげられている方々ばかりです。受賞記念のスピーチをお願いしており、大変楽しみにいたしております。

また、スピーチに続きまして、「生きづらさを抱える人の支援を考える」というテーマでシンポジウムを行います。私自身も大いに学ばせていただきましたと考えていますが、参加者の皆様には、この機会に受賞者の実践から多くを学んでいただき、今後の福祉のあり方について一緒に考えていただければ幸いです。

改めて今、我々は、糸賀先生のメッセージをそれぞれの立場でしっかり受け止めたと思います。糸賀先生は「自覚者は責任者である」とも言っています。私どもは、糸賀先生の思想と実践とを常にかみしめながら、一人ひとりの人が大切にされる真に心豊かな国を目指す営みを進めながら、この願いを世界中にも発信していきたいと思っておりますので、皆様には今後ともお力添えをお願い申し上げます。

結びに、受賞者の選考にご尽力賜りました選考委員をはじめ関係の皆さまに厚く御礼を申し上げますとともに、本日、「糸賀一雄記念賞」「糸賀一雄記念未来賞」を受賞されます皆様があります。ご活躍されますようお祈りし、ごあいさついたします。ありがとうございます。



この子らを世の光に

『この子らを世の光に』の「を」と「に」を逆にして『この子らに世の光を』とすると、この子どもたちは哀れみを受けなければならない存在であるという意味になってしまいます。しかし、この子らはみずみずしい生命力にあふれ、世の人々に生命のみずみずしさを気づかせてくれるすばらしい人格そのものです。

この子らこそかけがえのない「世の光」であり、「世の光」たらしめるべく、私たちは努力しなければなりません。糸賀一雄氏は「この子らを世の光に」の言葉とともに、大きな福祉の思想を私たちに託されました。

そして現在もなおこの言葉は、輝きを放ちながら生き続けています。